**復活節第７主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年５月12日**

**「大胆に語る」**

**エレミヤ書1章17節**

**1:17 あなたは腰に帯を締め／立って、彼らに語れ／わたしが命じることをすべて。彼らの前におののくな／わたし自身があなたを／彼らの前でおののかせることがないように。**

**使徒言行録14章1～7節**

**14:1 イコニオンでも同じように、パウロとバルナバはユダヤ人の会堂に入って話をしたが、その結果、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入った。**

**14:2 ところが、信じようとしないユダヤ人たちは、異邦人を扇動し、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。**

**14:3 それでも、二人はそこに長くとどまり、主を頼みとして勇敢に語った。主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。**

**14:4 町の人々は分裂し、ある者はユダヤ人の側に、ある者は使徒の側についた。**

**14:5 異邦人とユダヤ人が、指導者と一緒になって二人に乱暴を働き、石を投げつけようとしたとき、**

**14:6 二人はこれに気づいて、リカオニア州の町であるリストラとデルベ、またその近くの地方に難を避けた。**

**14:7 そして、そこでも福音を告げ知らせていた。**

**紀元46年から48年ごろ、パウロの第一次伝道旅行はそのころに行われたと考えられています。期間にして2～3年間です。距離はスタート地点のシリア州のアンティオキアから船でキプロス島に行き、ピシディア州のアンティオキアを経て、イコニオン、リストラ、デルべで折り返して同じ道を通って引き返してシリア州のアンティオキアまで戻りました。距離にすると約2000キロメートルの旅路であったのです。2000キロメートルと数字だけ言われても想像がつきませんが、日本の本州の最北端の青森から最南端の鹿児島までが約2000キロメートルありますので、距離にしたら日本列島縦断と同じです。日本列島縦断を2～3年かけて徒歩と船で旅をしたと聞きますと、ずいぶんゆっくりとした旅だなあという印象を持たれるかもしれませんが、パウロたちは伝道の旅をしています。旅先のユダヤ教の会堂でイエス・キリストの十字架と復活の福音を宣べ伝える伝道の旅をしているのです。**

**そして私たちが決して忘れてはいけないのが、この行先も期間もパウロたちが決めたものではないということです。13：4に「聖霊によって送り出されたバルナバとサウロ」とありますように、聖霊の導きなのです。聖霊によって導かれてこの場所に行って福音を宣べ伝えているのです。パウロたちが「この場所ではもう十分に福音を語ったから次に行こう」、反対に「この町ではまだ語り足りないからもう少し滞在して語ろう」と人間的な計画で物事を進めたのではないのです。聖霊の導きに従って旅を進めたのです。「もっと語りたい」と思っても、聖霊が「もう十分」と判断されれば次の所に行かなければいけないし、パウロたちが「もう十分」と思っても、聖霊がさらに語れと言われれば語らなければならないのです。聖霊の導きの旅、言い換えれば主に従う旅というものは決して人間的な思いで物事が進まないのです。主が「行け」と言われたところに行かなければならないし、「行くな」と言われたところには行けないのです。常に主の御心を祈り求めながら伝道の旅をしていくのが伝道者の歩みであり、さらには教会の歩みも同じであります。パウロもバルナバも、そしてパウロとバルナバを主の導きによって伝道者として立てて送り出した教会もまた主に従う喜びと共に、伝道は決して自分たちの思い通りに進まないことに困難さも覚えて主に信頼して旅を進めていったと思うのです。それは私たちの伝道の旅もまた決して私たちの思い通りには物事が進まない、全ては主の導きのもとでなされる、そして私たちは主によって豊かに用いられていることをこの朝共に御言葉から聞いていきたいと思います。**

**パウロとバルナバはピシディア州のアンティオキアから、約140キロ東の方に離れたイコニオンに行きました。二人はイコニオンにおいてもユダヤ教を信じるユダヤ人の会堂に入って、その礼拝の中でイエス・キリストの福音を宣べ伝えたのです。その結果大勢のユダヤ人たちやギリシャ人たち、すなわち異邦人たちが信仰に入りました。ただやはり、この町でもパウロの語る福音を受け入れようとしないユダヤ人たちは、同じように信じようとしない異邦人たちを扇動して、悪意を抱かせたのです。何とも不穏な空気の漂う嵐の予感がする言葉です。信じる人たちはパウロとバルナバが語る福音に喜んでいるけれども、信じようとしない人たちは苦虫を噛み潰したような顔をして何か悪事を企んでいる、非常に不穏な空気が漂っている。そんな様子が目に浮かびます。人間的に考えれば、そんな危険なところにいるよりも次の所に行って伝道したほうがより多くの人に伝道ができるでしょうし、より多くの人が信じることになるでしょう。さらには、自分たちの身の安全のことを考えれば一刻も早くここを立ち去った方がいいと思うのです。**

**でも、3節にとても興味深いことが書かれているのです。「それでも、二人はそこに長くとどまり、主を頼みとして勇敢に語った。」「それでも」と訳されている言葉は、「従って」とか「だからこそ」と訳せる言葉です。聞いている人々の雰囲気が非常に悪い、従って、だからこそ、パウロもバルナバも長くとどまったというのです。**

**「だからこそ、長くとどまる」ちょっと私たちには考えられないことです。実は、わずか7節しか記されていないイコニオンでの伝道が第一次伝道旅行で一番長く滞在したところなのです。具体的な期間まではわかりませんが、「長くとどまり」と書かれているのはここだけです。聞く人たちの雰囲気が悪い、だからこそ、そこで大胆に神の言葉を語るその場所こそが一番長く滞在した場所である、これは私たち人間の努力や意志だけでは絶対にできないことです。**

**「だからこそ」パウロとバルナバがしたこと、それは主を頼みとすることです。イエス様に信頼することなのです。自分たちの力で長く留まろうとするのではなくあくまでもイエス様の力に信頼して、大胆に語るのです。**

**3節はこう続きます「主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。」これは主ご自身が証しをされたということです。主ご自身が彼らに働いて下さり、しるしと不思議な業を通して恵みの言葉である福音を証しされたのです。それはちょうどかつてペンテコステの日に弟子たちに聖霊が降り、聖霊に満たされた弟子たちは聖霊の導きのままに他の国々の言葉で神の偉大な業を語ったようなものです。パウロとバルナバが自分の力で福音を語るのではなく、聖霊が語らせてくださる、主ご自身が語らせてくださるのです。主に信頼して主に委ねることで、主が人間を通してご自身の福音を恵みの言葉を、愛の御業を語りまた証して下さるのです。それゆえに伝道というのは人間の業ではなくて、主の業であることを彼らは改めて教えられたのではないかと思います。主に信頼し、主に委ねることで、主が恵みの言葉を証しをされる、主が自分たちを用いて福音を語って下さる、そのことが伝道において何よりも大切なことを、第一次伝道旅行の一番長くとどまったイコニオンの町で彼は教えられたと思うのです。**

**その結果どうなったかと言いますと、町の人たちは分裂します。ユダヤ人につく人たちとパウロたち使徒たちにつく人たちに分裂したのです。さらに、ユダヤ人につく人たちとパウリが語る福音を信じようとしない異邦人たちがパウロたちに石を投げつけようとしました。かつてステファノが集団で石を投げつけられて殺されたように、同じ目に遇いそうになりました。そのために二人は南に40キロ離れたリストラに行き、さらに東に60キロ離れたデルべに行き、そこでも主に信頼して福音を告げ知らせたのです。**

**昨日夕方一人の青年の方が教会を尋ねてこられました。「教会を見せていただけませんか」そう言われて私は礼拝堂に案内しました。すると彼は「実は私は各地の教会をまわっています」と話を始められました。最初は悩みごとの話でしたので黙って聞いていました。そのうちに、彼は「私は教会の礼拝に行ったことがないのですが、一人で聖書を読んで祈っていて、聖書の内容が示されました」と自らの霊的な体験とそれがいかに聖書箇所に結び付くのかを、いかに自分に聖書の知識があるのか、ヘブライ語ギリシャ語をも用いて私が口をはさむ余地も与えずにひたすら自分のいいたいことを話し続けました。私はだんだんと彼が何を言いたくて教会を尋ねて来たのかさっぱりわからなくなりました。一向に終わりそうにないので私は「1時間半あなたのお話を黙って聞いていましたが、あなたが何を言いたくて来られたのかさっぱりわかりません。要するに何を言いたいのですか」と尋ねたところ、彼は聖書の中のある特定の教えを持ち出して、「この教えの大切さを教会に広めるために、そして牧師さんに危機感を共有してほしいから私は来ました」と言い始めました。**

**異端でした。最初私は「教会を探しているのかな。何かを求めてこられたのかな」と思って真剣に聞いていたのですが、教会に基づかない聖書の独自の理解でひたすらに話し続けて私を説き伏せようとするその姿に怖さを覚えると共にとても残念な気持ちになりました。**

**私は改めて聖書は教会で読まれることが大切だと思いました。家で一人で聖書を読んでお祈りをする、もちろんそれも大切です。けれども、それが教会に基づかないで、教会に繋がることなく続けられると自分と神様だけの関係になってしまうのです。そして様々な霊的な体験が本当に神様からのものなのかそうではなくて別の力によるものか区別ができなくなるのです。そのうちに自分は神から選ばれた特別な人間だと思うようになってしまうのです。それは自分の罪も十字架の死もわからなくなり、こんな罪深い私のためにイエス様が十字架に掛かって死んでくださり復活して下さったその愛と恵みがわからなくなってしまうのです。罪深い人間だからこそ教会に行って教会の中で礼拝を通して語られる御言葉を聞くことが大切で、その御言葉によって生かされて養われていく。そして共に御言葉を聞いて分かち合い、祈りあい、支え合って慰め合っていく教会の交わりの中で生かされていくことが大切なのです。その中で自分の信仰が間違った方向に進もうとすると、教会の中でその方向が神様の方に向き直っていくのです。教会を離れてしまうことがあっても、自分のために祈ってくれている教会の仲間の信仰によって教会に呼び戻されるのです。そのようにして私たちは教会に繋がるからこそイエス様に信頼することの大切さを日々教えられて信仰の歩みを進めていくのです。だからこそ、私たちの伝道も私個人の思いを勝手な解釈によって言いたい放題に話すのではなくて、教会の信仰を主の導きによって私たちが宣べ伝えて証しをしていくのです。**

**パウロとバルナバがイコニオンの会堂で宣べ伝えた福音はパウロやバルナバの個人的な解釈ではありません。教会によって伝道者として立てられたパウロとバルナバは教会の大切さを何よりもよく分かっていました。自分たちのために教会の人たちが祈りをもって支えて下さっていることが良くわかっていたのです。教会の交わりの中で信仰が育まれて行ったことが良くわかっていたのです。だからこそ、彼らは教会が信じるイエスキリストの十字架と復活の福音をまだキリスト教会のないこのイコニオンの町で大胆に語ったのです。彼らが主に信頼し、主ご自身が二人を通して働いて下さったお陰でイコニオンの町にも教会が誕生しました。大胆に福音を語ることができるのも主に信頼して、主が働いて下さるおかげです。自分の言いたいことをひたすらに話すのとは違います。**

**皆さんに配布しました5月の役員会報告にありますが、今年度は数年ぶりに伝道集会を行います。もちろん教会の業として行うのです。私たち諏訪教会がパウロやバルナバのように教会が信じ大切にしているイエス・キリストの十字架と復活の愛を宣べ伝え証しをしていくのです。主を信頼して伝道の業に励み、私たちも大胆に福音を語るのです。そこに主ご自身が働いて下さり私たちを豊かに用いて下さるのです。まだイエス・キリストの福音を知らない人に届けて下さるのです。だからこそ私たちは主に信頼していきましょう。**